

築を繰り返してきた時間の重なりを見せていきたいと思っています。

齋賀 階段脇にはエレベーターを設置します。ここでも階段途中のコンクリートブロックを部分的に取り除き、物置を「棧敷」として開放したい。見えなくなっているものを見えるようにすることで、一九六七年の開館当時の架構を乗り越えていくルートにしたいと思っています。

二階の「原爆の図」展示室はフラットな天井を勾配天井に変えて、トックライトの光をやわらげるテントをかけます。今の美術館は大雨や強風の日は内部まで音が聞こえてくる。窓や開口部も美術館としては多い。展示・保存の環境の性能をあげようとする、どうしても今の美術館らしさが失われてしまう。それでも、できるだけ外とのつながりを残しながら変えていきたいと思っています。現在は二階に八点の「原爆の図」が展示されていますが、十点を展示するために間仕切りを解体して、ひとつの大きな展示空間にしようと思っています。天井から吊るテントという仮設的なアイデアは、「原爆の図」の可変性から連想したものです。一階の複雑な変更の経過の表現に対して、二階は「原爆の図」の展示に限定して要素を間引くことで役割の差異を明確にしたいと思っています。

一階廊下は左右の壁の表情に差をつけ、かつてのように作品を展示できる場所に戻そうと考えています。

八木 二階を増築したときにできた不自然な空洞が、今は一階の壁のなかに隠されている。壁を部分的に開けてアルコーブ(くぼみ)に作り替え、廊下の途中で腰をかけたたり、壁面の展示を観たりする合間の時間を生むスペースを考えています。

齋賀 この長い廊下は、開館当初のかたちを残し、奥に追加された建物につながっていく特徴的な空間です。その空間に、ちよつと立ち止まる役割をもたせたいと思っています。

小高文庫は、一階の展示室の役割はそのままにして、アトリエの雰囲気もできるだけ残したいと考えていますが、壁を部分的に取り払って境界を変化させたいと思っています。

八木 一階は展示室として閉じた空間になつていますが、吹き抜けを作ったり、足もとに開口を作ったりすることで、二階や外の雰囲気を感じられるようにしたいと思っています。

齋賀 現在の企画展示室は、「原爆の図」の後期の四点を常設展示します。今より低い位置に新しく天井を設置して、テントを吊ることでトックライトの光をやわらげようと考えています。二階と考え方は同じで、「原爆の図」の展示のために目に入

る要素を制限して、となりあう伝統的な建築である小高文庫との差異を明確にしたい。丸木美術館は建設された時期も構造もサイズも素材も異なる建築が寄せ集まっている。そういう丸木美術館らしさを表現できると思うと思っています。

八木 今は屏風の「原爆の図」を展示台に置いていますが、今後は屏風と壁にフラットにかけられる展示を組み合わせたことも考えています。今までは使っていた展示台の仕上げ材は丁寧に取り外して、新しい展示台に転用しようと考えています。

齋賀 新館は常設展示室から企画展示室に変更するため、照明の移動を簡単にするフレームを追加し、展示の幅を広げようと考えています。テラスと接続した展示ができる大型可動壁も計画に取り入れようと検討しています。

八木 新館の奥に落ち着ける場所を作りたい。テラスから外の敷地をまわられる階段の設置も考えています。



11月23日に丸木美術館で開催された改修計画案発表。トークの様子は録画し、丸木美術館の公式YouTubeチャンネルで配信しています。 <https://www.youtube.com/watch?v=nUzGmJ2Lm3Y>

齋賀 丸木美術館はいくつもの建築がパッチワーク状に重ね合されて作られています。どこを切り取っても同じ形がなく、全体像をとらえにくい。「変化のかけら」に着目しながら、部分的に古いものを除いたり、新しいものを加えたりして、各部分の関係やつながりに変化が生まれてくれば、たくさん表情をもったこの美術館に流れてきた豊かな時間を表現できるのではないかと考えています。

「美術館らしくなく」を継続する

内山 発表を聞いてワクワクしました。私はこのエントランスが大好きで、全然美術館らしくない、公民館に似たような感じなんです。普通、増築は新しいものを加えて古いものを隠す作業ですが、今回は歴史を露わにすることで、新しい親しみやすさが生まれてくる。一方で、これからどう生き残っていくかが大事。古い建物は断熱性能が問題なので、予算の課題はあるが、息の長い在り方を探ることが必要だと思います。

岡村 絵画を保存し、快適な鑑賞環境を提供する上で、効率よく環境を整える工夫はありますか？

齋賀 屋根や壁の断熱性能を高めることが重要ですが、この美術館は増改築を繰り返して、平面積に対して壁の面積が多い。収蔵庫と「原爆の図」展示室は比較的環境変化の少ない場所を選んだので、どこまで重点的に整備できるか考えたいです。

岡村 これまでの増築は、より展示室を大きくする変化でしたが、今回の改修はバックヤードを作った展示室を減らすんです。常設展示を減らして、作品保存も考慮する。それは美術館の今後の負荷を減らすための重要な変化と考えています。

水沢 改修は、風通しを良くするチャンス。私は接頭辞の「un-」にこだわっていて、丸木美術館も既存の濃厚な記憶や経験をほどいてみる必要がある。棧敷や廊下の「抜ける」工夫は「un-」すること。環境に目を向けて外に行きたいと思わせる導線になる。その先の散歩道に位里さんや俊さんの彫像を置くのも良い。そこから川へ降りていくという、これはひとつの提案ですけど。

岡村 齋賀さんは長い直線の廊下を早い段階から気に入っていました。テラスから外に抜ける階段の構想とつながっているのでしょうか。

齋賀 この美術館には視線が突き抜けていく軸がある。かつては竪穴住居があったり、敷地とつながっていた。階段を加えることで、直線の意味が変わると思いました。

内山 考えさせられる作品が多いので、呼吸を変えられる場所があちこちにあることが大事だと思います。

岡村 アルコーブの発想は面白いですね。今は掃除のモップが置いてあったりするのですが、隙間に開館当時の構造が残されている。

齋賀 建築として名づけようがない隙間。変化の過程で生まれた隙間は、直接「原爆の図」と関係ないですが、調べていくと作品の展示と不可分な関係にあることが見えてきます。

岡村 今の美術館は車椅子が動きにくい。床の高低差の解消やエレベーターの設置は可能ですか？

八木 小さいエレベーターなら入りそうです。優先事項と考えています。

齋賀 エレベーターは、どこかを解体しないと設置できないのですが、八木が図面を引きながら隙間を発見してくれたので収まりそうです。

岡村 一方で、おふたりは、二階ができた当時に階段の天井に設置された昇降機のレールを残したいとおっしゃるんですね。そうした美術館の先駆的な姿勢を残したいと。

齋賀 半分は面白いと思ったから。昇降機を初めて使った頃の写真を見て、イベントのように感じたので。

八木 レールが残っていなければ気づけないので、残そうと思いました。

岡村 八〇年代の丸木美術館は先駆的な運動の実践の場でもあったんです。おふたりは『丸木美術館ニュース』を第一号から目を通して歴史を学んでくれました。「原爆の図」を未来に残すことは重要ですが、そのまわりで起きたことも改修を機に可視化されていくのではと感じます。

齋賀 ニュースを読んで美術館にいろんな方がかかわっていることが読みとれました。建築に関する言葉を選んだのですが、私が選ぶ言葉と八木の選ぶ言葉も違うんですね。

八木 私が選んだのは人間のおかしみがある言葉。この場所は位里さん、俊さんの生活の場でもあったので。

岡村 画家の生活の場と美術館がとなりあっていたのは、この場所の重要な特徴でもあったと思います。リニユールによって場所の意味が変わることは、どう考えますか？

水沢 故人の思い出は遠のいていきますが、デンマークのルイジアナ美術館のように個人宅が美術館として発展する例もあり、丸木美術館もその流れにある。場所の意味を際立たせる改修案が大事だと思います。

内山 新しい風景を獲得して、来館者が何かを重ね合せていくのだと思います。時が流れて作家はいなくなっても、作品があることで、多くの支援が集まり、スタッフが苦勞して、場所が継続されていく。それがリノベーション。川の対岸から眺める美術館の風景が素晴らしいので、ぜひ生かしてほしいですね。

齋賀 この美術館の枠に収まらない美術館らしくなさは、逆に今の美術館に必要なものだと思います。そういう姿を今後もどう継続していけるのかを考えて設計したいです。

八木 少人数で運営しなければいけない現実があるので、機能していくように考えたいと思っています。

(抄録まとめ・岡村幸直)